

意思決定科学

期待効用理論

情報学部 経営情報学科
堀田敬介

2009.10.2,Fri.

Contents

主観確率

期待値と主観確率

期待効用理論

セントペテルスブルグの逆説

期待効用仮説

効用関数

主観確率

例1

サイコロを1回振り、6の目が出たら6千円もらえる賭けがある。
いくらなら参加する？

賞金額に対する満足度が比例するならば、通常の期待値の考えで参加費を算出可能。

$$E(X) = \sum_{i=1}^n p_i x_i$$

$[x_i : \text{賞金額}, p_i : x_i \text{の生起確率}]$

主観確率

演習

期待値の計算[宝くじの期待値]

H21オータムジャンボ宝くじ(2009/9/28～)

宝くじ1枚300円

その価値があるのか？

発売枚数:1億3千万枚
1千万枚辺りの当選数

等級	当せん金	本数
1等	150,000,000円	1本
1等前後賞	25,000,000円	2本
1等組違賞	100,000円	99本
2等	10,000,000円	10本
3等	1,000,000円	100本
4等	100,000円	1,000本
5等	1,000円	300,000本
6等	300円	1,000,000本
秋祭り賞	10,000円	30,000本

主観確率

例2

2つのくじをどちらか1回引ける。どっちがいい？

Lot 1

0.3 : ¥10,000
0.7 : ¥2,000

>

Lot 2

0.3 : ¥8,000
0.7 : ¥1,000

(普通は) Lot1 を選ぶ。

良くても悪くてもくじ Lot1 の方が Lot2 より良い結果が得られる!

当然、期待値を計算しても Lot1 の方が良い!

$$\frac{3}{10} \times 10000 + \frac{7}{10} \times 2000 = 4400 > 3100 = \frac{3}{10} \times 8000 + \frac{7}{10} \times 1000$$

主観確率

例3

2つのくじをどちらか1回引ける。どっちがいい？

Lot 1

0.3 : ¥10,000
0.7 : ¥2,000

<

Lot 3

0.5 : ¥10,000
0.5 : ¥2,000

(普通は) Lot3 を選ぶ。

良い時と悪い時に得られる結果は同じであるが、Lot3 の方が良い結果が得られる確率が高い!

当然、期待値を計算しても Lot3 の方が良い!

$$\frac{3}{10} \times 10000 + \frac{7}{10} \times 2000 = 4400 < 6000 = \frac{5}{10} \times 10000 + \frac{5}{10} \times 2000$$

Confidential

1

主観確率

例4 2つのくじをどちらか1回引ける。どっちがいい？

Lot 4

0.4 : ¥10,000
0.6 : ¥2,000

Lot 5

0.1 : ¥6,000
0.9 : ¥5,000



主観確率

例4 考察

Lot 4

0.4 : ¥10,000
0.6 : ¥2,000

Lot 5

0.1 : ¥6,000
0.9 : ¥5,000



- Lot5 を選ぶかな...
- Lot4 は悪い結果が出る確率が高く、その時得られる賞金額がかなり低い!
- Lot5 はいずれの結果でも5,000円は保証されている!
- ちょっと待って! 誰もが Lot5 を選ぶの?
- 期待値を計算すると Lot4 の方が良いのだ!
- 失敗した時に得られる賞金額は少ないが、成功報酬が魅力だ! 賭けにリスクはつきものだ! だから Lot4 の方が魅力的なのだ!

主観確率

例4 考察

- Lot4 を選ぶ人 $\rightarrow$ 「リスク嗜好」型人間
- Lot5 を選ぶ人 $\rightarrow$ 「リスク回避」型人間

■ 期待値の法則に基づかない意思決定者が主観的に持っている**確からしさ**が、意思決定の重要な要素になっている!

主観確率



期待効用理論

- セントペテルスブルグの逆説 St. Petersburg paradox
- 期待効用仮説 expected utility hypothesis
- 効用関数 utility function

セントペテルスブルグの逆説

例5 サイコロの出た目による賭けがある。賭けの参加料は1,000円である。

1, 2, 3, 4, 5, 6

$\rightarrow$ 2,000円貰える

1, 2, 3, 4, 5, 6

$\rightarrow$ 0円貰える

この賭けの期待値は?



セントペテルスブルグの逆説

例6 サイコロの出た目による賭けがある。

- サイコロを奇数の目が出るまで振り、その回数がNの時、 2^N 円貰える。
- N=1:奇数 $\Rightarrow$ 2円貰える
- N=2:偶数, 奇数 $\Rightarrow$ 4円貰える
- N=3:偶数, 偶数, 奇数 $\Rightarrow$ 8円貰える
- N=4:偶数, 偶数, 偶数, 奇数 $\Rightarrow$ 16円貰える
- N=i:偶数, ..., 偶数(i-1回), 奇数 $\Rightarrow$ 2ⁱ円貰える

■ この賭けで得られる賞金の期待値は?

■ この賭けの参加料はいくらなら妥当か?



セントペテルスブルグの逆説

例6 考察

回数	確率	貰える額
$N=1$	$P(N=1)=1/2^1=1/2$	$2^1=2$ 円
$N=2$	$P(N=2)=1/2^2=1/4$	$2^2=4$ 円
$N=3$	$P(N=3)=1/2^3=1/8$	$2^3=8$ 円
$\vdots$	$\vdots$	$\vdots$
$N=i$	$P(N=i)=1/2^i$	2^i 円

期待値は $E(X) = \frac{1}{2} \times 2 + \frac{1}{4} \times 4 + \frac{1}{8} \times 8 + \dots + \frac{1}{2^i} \times 2^i + \dots$
 $= 1 + 1 + 1 + \dots + 1 + \dots = \infty$

つまり、1億円払ってでもこの賭に参加すべき!?

セントペテルスブルグの逆説

例6 考察

- この賭け、いくらだったら参加するだろうか?

↓ もっと現実的な設定にしてみよう!

- 賭けの主催者が払える最高額が 2^{50} 円! (大金)
つまり、 $N \geq 50$ 回の利得はいつでも 2^{50} 円とする。

演習 ところで、 $2^{50} = ?$
Ans. 1,125,899,906,842,620

セントペテルスブルグの逆説

例6 考察

$N=1$	$P(N=1)=1/2$	2 円
$N=2$	$P(N=2)=1/4$	2^2 円
$\dots$	$\dots$	$\dots$
$N=49$	$P(N=49)=(1/2)^{49}$	2^{49} 円
$N \geq 50$	$P(N \geq 50)=(1/2)^{49}$ (ノート参照)	2^{50} 円

■ 期待値は、
 $E(X) = \frac{1}{2} \times 2 + \frac{1}{4} \times 4 + \frac{1}{8} \times 8 + \dots + \frac{1}{2^{49}} \times 2^{49} + \frac{1}{2^{49}} \times 2^{50}$
 $= 1 + 1 + 1 + \dots + 1 + \dots + 2 = 51$

セントペテルスブルグの逆説

例6 考察

- 賭けの主催者が 2^{50} 円 を持っていてもプレイヤーの期待利得が 51円!

不確実性のある意思決定問題における意思決定主体の評価基準は、期待値は適当ではない

➡ 意思決定主体の主観にもとづく効用関数を使おう

期待効用理論

■ 期待効用理論

- 期待値ではなく期待効用を使うことにしよう

価値そのもの

得られた価値に対する嬉しさ(効用)

価値を使って考える(期待値)のではなく、得られた価値に対する嬉しさを使って考えよう(期待効用)

期待効用理論

■ 期待効用仮説

意思決定主体は複数のくじ
 $z = [x_1, \dots, x_n; p_1, \dots, p_n]$

の選択において、期待効用
 $\sum_{i=1}^n p_i u(x_i)$
を最大にするくじを選択する。

↔ $\sum_{i=1}^n p_i x_i$ 期待値

貨幣額 x_i に対する効用

ex)
 $z = [10000, 2000; 0.3, 0.7]$

➡ (1) 意思決定主体のくじに対する選好順序がどのような性質を満たせば、期待効用仮説が成立するか?
(2) 期待効用仮説が成立するとき、意思決定主体の効用関数 $u(x)$ はどのような性質をもつか?

期待効用理論

- 選好順序 preference order
 - 2項関係 $\succ$ を集合 X 上の選好順序という
 - 例) $P \succ Q$: P は Q よりも好まれる
- 弱順序 weak order
 - 集合 X 上の2項関係 $\succsim$ が弱順序であるとは、以下が成立すること
 - $P, Q \in X$ に対し、 $P \succ Q$ ならば、 $P \sim Q$ ではない。
 - $P, Q, R \in X$ に対して、 $P \succ Q$ でなく、かつ $Q \succ R$ でなければ、 $P \succ R$ でない。
 - 集合 X 上の弱順序 $\succsim$ に対して、 X 上の2項関係 $\sim$ を以下に定める。
 - $P, Q \in X$ に対し、 $P \sim Q$ は、 $P \succ Q$ でなく、かつ $P \prec Q$ でないこと。
 - $P, Q \in X$ に対し、 $P \sim Q$ は、 $P \succ Q$ または $P \prec Q$ のこと。

無差別 indifference 弱選好 weak preference

期待効用理論

合理的な意思決定主体がもつ選好関係は少なくとも弱順序

- 集合 X 上の選好順序 $\succ$ に関する3つの公理
 - 公理1[合理性] $\succ$ は X 上の弱順序である
 - 公理2[独立性] $P \succ Q$ ならば
 - $\forall \lambda \in (0,1), \lambda P + (1-\lambda)R \succ \lambda Q + (1-\lambda)R$
 - 公理3[連続性] $P \succ Q, Q \succ R$ ならば、
 - $\exists \lambda, \mu \in (0,1), \lambda P + (1-\lambda)R \succ Q \succ \mu P + (1-\mu)R$

意思決定主体の選好順序が上記3つの公理を満たせば、期待効用仮説が成立する。

期待効用理論

P :キリマンジャロ
 Q :モカ
 R :ハワイコナ

- 例:珈琲の選好
 - $P \succ Q$ なら $P \prec Q$ でない
 - $P \succ Q$ でなく $Q \succ R$ でないなら $P \succ R$ でない
- 公理1[合理性] 弱順序(反対称性, 負推移性)
- 公理2[独立性] $P \succ Q$ なら $\forall \lambda \in (0,1), \lambda P + (1-\lambda)R \succ \lambda Q + (1-\lambda)R$
- 公理3[連続性] $P \succ Q, Q \succ R$ なら
 - $\exists \lambda, \mu \in (0,1), \lambda P + (1-\lambda)R \succ Q \succ \mu P + (1-\mu)R$

■が成り立つとき ■が成立

期待効用理論

表現定理:
公理1~3が成り立つための必要十分条件は、以下の(1),(2)が成り立つこと。

- フォン・ノイマン=モルゲンシュテルン効用関数
 - 以下の2つを満たす実数値関数 u を、選好順序 $\succ$ に関するフォン・ノイマン=モルゲンシュテルン効用関数という。
 - (1) $\forall P, Q \in X, P \succ Q \Leftrightarrow u(P) > u(Q)$
 - (2) $\forall P, Q \in X, \forall \lambda \in (0,1), u(\lambda P + (1-\lambda)Q) = \lambda u(P) + (1-\lambda)u(Q)$

期待効用理論

- フォン・ノイマン=モルゲンシュテルン効用関数の一意性
 - 以下の2つを満たす実数値関数 u は、正一次変換を除いて一意。
 - (1) $\forall P, Q \in X, P \succ Q \Leftrightarrow u(P) > u(Q)$
 - (2) $\forall P, Q \in X, \forall \lambda \in (0,1), u(\lambda P + (1-\lambda)Q) = \lambda u(P) + (1-\lambda)u(Q)$

$u(P_0)=0$ を満たす P_0 と、 $u(P_1)=1$ を満たす P_1 を定めれば、一意に決定する。

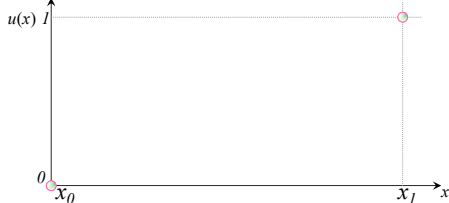
期待効用理論

- リスク回避度
 - X 上の関数 $u(X)$ が、
 - 凸 $\Leftrightarrow \forall P, Q \in X, \forall \lambda \in (0,1), u(\lambda P + (1-\lambda)Q) \geq \lambda u(P) + (1-\lambda)u(Q)$
 - 凹 $\Leftrightarrow \forall P, Q \in X, \forall \lambda \in (0,1), u(\lambda P + (1-\lambda)Q) \leq \lambda u(P) + (1-\lambda)u(Q)$
 - affine $\Leftrightarrow \forall P, Q \in X, \forall \lambda \in (0,1), u(\lambda P + (1-\lambda)Q) = \lambda u(P) + (1-\lambda)u(Q)$
 - 効用関数 $u(X)$ が、
 - リスク愛好的(risk-loving) $\Leftrightarrow u(X)$ が凸
 - リスク回避的(risk-averse) $\Leftrightarrow u(X)$ が凹
 - リスク中立的(risk-neutral) $\Leftrightarrow u(X)$ がaffine

効用関数

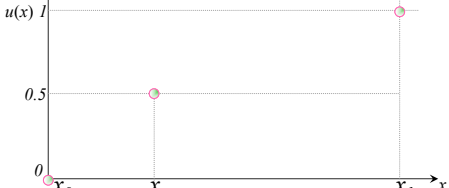
■ 効用関数 $u(x)$ の求め方の一例

- [step0] 最低の満足度を 0, 最高の満足度を 1 とする
 - $u(x_0)=0$, x_0 で最低の満足度(効用)0 が得られる
 - $u(x_I)=1$, x_I で最高の満足度(効用)1 が得られる



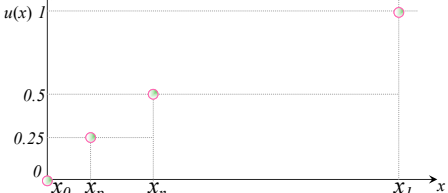
効用関数

- [step1] 以下のくじ I, II を考える. どちらでも満足度が同じになる x_n を決める
 - くじ I : 確率 1/2 で x_0 , 確率 1/2 で x_I が得られる
 - くじ II : 確率 1 で x_n が得られる ($x_0 < x_n < x_I$) $\Rightarrow u(x_n)=0.5$ とする



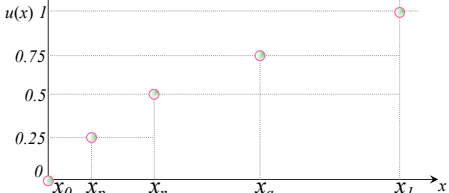
効用関数

- [step2] 以下のくじ III, IV を考える. どちらでも満足度が同じになる x_p を決める
 - くじ III : 確率 1/2 で x_0 , 確率 1/2 で x_n が得られる
 - くじ IV : 確率 1 で x_p が得られる ($x_0 < x_p < x_n$) $\Rightarrow u(x_p)=0.25$ とする



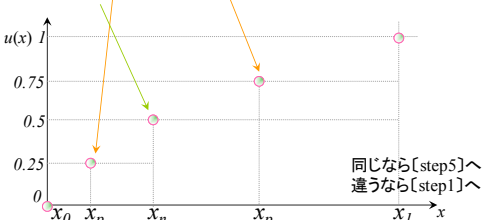
効用関数

- [step3] 以下のくじ V, VI を考える. どちらでも満足度が同じになる x_q を決める
 - くじ V : 確率 1/2 で x_n , 確率 1/2 で x_I が得られる
 - くじ VI : 確率 1 で x_q が得られる ($x_n < x_q < x_I$) $\Rightarrow u(x_q)=0.75$ とする



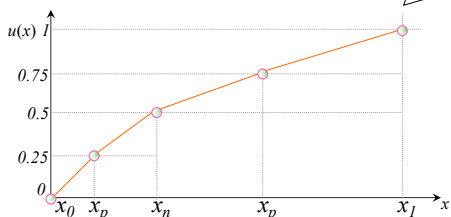
効用関数

- [step4: 検証] 以下のくじ VII, VIII を考える. どちらでも満足度が同じになることを確認する.
 - くじ VII : 確率 1/2 で x_p , 確率 1/2 で x_q が得られる
 - くじ VIII : 確率 1 で x_n が得られる



効用関数

- [step5] 間を結んで完成



これはリスク回避的な人の効用関数

効用関数の利用

例4再考 どちらか1回引ける. どっちがいい?

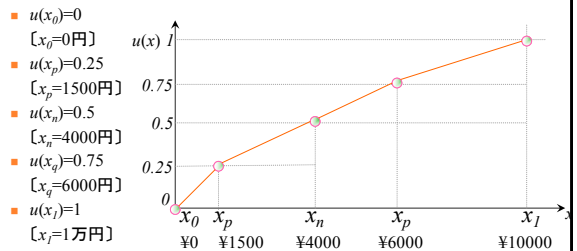


演習 各々効用関数を作成し, 期待効用値 E^* を求めてみよう!

$$E^* = \sum_{i=1}^n p_i u(x_i) \quad \left(\begin{array}{l} u(x_i) : \text{効用関数} \\ p_i : x_i \text{の生起確率} \end{array} \right)$$

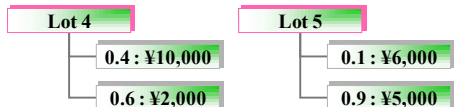
効用関数の利用

例4再考 効用関数による期待効用値計算例



効用関数の利用

例4再考 効用関数による期待効用値計算例



効用

- $u(10,000) = 1.00$
- $u(6,000) = 0.75$
- $u(5,000) = 0.65$
- $u(2,000) = 0.30$

期待効用

$$\begin{aligned} E^*(Lot4) &= 0.4 \times 1.00 + 0.6 \times 0.30 = 0.58 \\ E^*(Lot5) &= 0.1 \times 0.75 + 0.9 \times 0.65 = 0.66 \end{aligned}$$

この人は, Lot5を選ぶ

参考文献

- [1] 岡田章「ゲーム理論」有斐閣(1996)
- [2] 木下栄蔵「わかりやすい意思決定論入門」近代科学社(1996)
- [3] 日本OR学会編「OR事典2000」(2000)
- [4] 中山弘隆・谷野哲三「多目的線形計画の理論と応用」コロナ社(1994)
- [5] 鈴木光男「ゲーム理論入門」共立出版(1981,2003[新装版])
- [6] 木下栄蔵編「AHPの理論と実際」日科技連(2000)